

92. 日本における「国際政治（学）」の誕生－「神川彦松日記」の基礎的研究

東京都立大学法学部 准教授 佐藤 信

概要

本研究課題は神川彦松の50冊を超える新出日記の基礎的研究である。

神川彦松は戦前・戦中には東京帝国大学的外交史担当者として学界・官界に影響力を持ち、戦後にはその職を追われたものの日本国際政治学会初代理事長や日本国際問題研究所初代所長を務め、『日本外交文書』の編纂にも携わるなど、日本における「国際政治（学）」や「シンクタンク」の始祖として知られる。

本研究課題においては、所定の通り全巻のデジタル化や生地の現地調査を実現したほか、多くの若手研究者・大学院生の協力を得て戦時期を中心とした翻刻を実現した。これによって、本日記が時局との関係や学問形成の過程のみならず、東京帝国大学（とりわけ法学部）内部の事情なども具に明らかにすることができる一級史料であることが明らかになった。本研究課題は今後の豊かな研究可能性を示すとともに、その土壌を開拓した。

神川彦松日記の特長

神川彦松は、戦前・戦中には東京帝国大学的外交史担当者として学界・官界に影響力を持ち、戦後には公職追放に遭ったものの日本国際政治学会初代理事長や日本国際問題研究所初代所長を務め、『日本外交文書』の編纂にも携わるなど、日本における「国際政治（学）」や「シンクタンク」の始祖として知られる。

戦後の憲法改正論などの旺盛な活動の印象とは裏腹に、神川は硬派な研究書の執筆に徹してエッセイや回想録を殆ど残さず、神川の知的淵源や政治活動は明らかではなかった。今回研究代表者が発見した1917年から1985年まで約50冊に及ぶ膨大な日記は、日本における外交史（学）、国際政治（学）、シンクタンク、日本外交文書編纂などに関する歴史を書き換える可能性のある重要史料である。

経過

この日記の基礎的研究である本研究課題は、①史料のデジタル化、②基礎的調査、③松阪現地調査、④本格的分析を予定し、今後の本日記の研究可能性を見極めることを目的としていた。以下に詳しく紹介するように、デジタル化や現地調査など所定の目的を達成した他、当初の予定を超えた一部翻刻を実現したことで、より多様な可能性を見出すことに成功し、今後の具体的な研究プロジェクトにも繋がるものとなった。

①史料のデジタル化

将来的にデジタル化史料の公開ができるよう、複数のデジタルアーカイブを擁する機関にどの専門業者を利用しているかヒアリングを行ったうえで、インフォマージュ社に依頼して全頁のデジタル化を実現した。結果的に当初予想より安価に実現することができたため、その予算を②に回して研究を予定以上に進行させることができた。

②基礎的調査

予定通り、東京大学近代日本法政史料センター原資料部所蔵「神川彦松関係文書」の調査を行った。当該史料はこれまで利用されていなかったもので、講義資料を中心にそれなりの分量があるものの、一度寄託されたとみられる書簡などは遺族に返却されており、神川の事績を追うことは難しい史料であった。従って、今回発見された日記と組み合わせることは不可欠な作業となろう。

基礎的調査としては、予定していた上記に加えて、①で生じた予算を利用して、あまりに膨大な日記を効率的に分析するため、戦後の活動の前提をなす戦時期（1938-1945年）を中心とした翻刻を行った。その他、くずし字の難易度の高かった1917年のうち1-2月の翻刻も試験的に実施した。

短期間に可能な限り多くの翻刻を実現するため、北は釧路公立大学から南は九州大学まで、多くの若手研究者・大学院生の協力を得た。地理的にも分散したメンバーに未公開史料を効率的に翻刻してもらうため、実施にあたっては参加者全員から守秘につき同意書をとったうえで、オンラインで史料を共有して翻刻を提出してもらう体制を整え、二期に分けて実施することで、計2464コマの翻刻を実施した（1コマ当たり見開き1頁）。翻刻の精度は、必ずしも即時公開を行う水準には達していないが、④に示すような知見はこれを受けて初めて得ることができたものである。

③松阪現地調査

神川は養子に入ったこともあって出身地における動向が不詳であったことから、生家・養家の現地調査を行った。生家（奥山家）にヒアリングを行って関連書簡を入手（複写）し、玉城町図書館で関連資料を収集することができたほか、玉城町長と面会するなど出身地における神川をめぐるナラティブも収集することができた。その後、幸運にも玉城町長経由で神川の別の遺族を紹介され、大規模な史料を入手できる可能性が生まれている。当該追加史料については現在進行形であり、今後は見通せないが、このようなセレンディピティもまた現地調査を行ったことの意義であろう。

④本格的分析

翻刻作業に取り掛かることができた一方で、本格的分析にかけることができる時間はごく限られた。それでも②によって得られた翻刻を中心に新たな知見を得ることができた。翻刻できた時期を主とすべく一時的な評価に留まるものの、以下のような点を挙げるができる。

第一に、戦時下に「たえず学び、たえず向上し、たえず修正しゆくは自分の行程である」（1944年7月5日）と書いた彼の思想的遍歴は決して一徹したものではないことが明らかになった。後に自主憲法制定を強調した新憲法についても、当初はその「強制」に不満を持つ一方で、「改正案は他から与へられたものだけに […] わが民族自身の手で作り得ないほど立派なものであることも争はれぬ事実だ」と評価し、その憲法実行という「神的事業」を実現するために「わが民族の心的再生がまず要請」されると書きつけていた（1946年8月23日）。

第二に、それだけに戦後の活動の前提としての今回翻刻した戦時期の活動や人脈が重要である。本日記は読書やその読後感なども綴っていることから、彼の論考の背景を知ることが可能である。たとえば1940年7月20日にヒトラーの『我が闘争』を読みその「自助的努力」に「感歎」しているが、その前日にはエレン・ケイ『恋愛と結婚』を読んで「一夫一妻主義に対する近代的批判」に価値を見出している。直後の29日には「ゲオ・ポリティク」（「地理政治学」と訳すことに決める）を学びながら「生物学的国家観」を採用することを決意している。これらの連関はさらなる考究を要するが、そのような考究を可能にする史料は貴重である。

第三に、日記の記載が教授会や全学評議会の内容についても詳細に書き留めているために、平賀肅学など東京帝国大学法学部および全学の動向の史料としても極めて有用であることが発見された。神川が評議員として近くで見聞していた平賀肅学の経過もさることながら、法学部内では安井郁の処遇をめぐる継続的な対立も新たに注目される。神川は安井を立作太郎の国際法講座後継者として推挙したが、安井を時局迎合的とみた横田喜三郎、さらには田中耕太郎が進退を懸けて抵抗した。学部内平和のため動いたのは南原繁・高木八尺・我妻栄であり、安井の教授昇格は実現するが、こうした学部内の人間関係が東京帝大法学部の戦後にまで至る動向の前提をなした。

第四に、本日記は「百歳長寿」を念願とした神川の人生観や健康観の記載を多く含む。神川は長寿の偉人を長命であること自体によって高く評価し、その人生観や健康法を採り入れようとした。それは現在幅広く受容されている非属人化された学問観と大きく隔たっているがゆえに興味深い。岡田式静座法など健康法と修養ブームや知識人ネットワークの連関は近年注目を集めている研究領域でもあり、本日記はこのような連関を探ること、知識人の総体的分析に資する史料である。

今後の展望

基礎的研究と銘打った本研究課題は、今後の研究の土壌を開拓した。当初予想しなかった広がりも生まれた。以下では本研究助成によって拓かれた展望を示す。

①さらなる史料の登場と公開の可能性

今回の研究助成によって実現した日記すべてのデジタル化は、将来的にこの史料を幅広く公開し、さらなる研究の発展に繋げることを企図していた。デジタルアーカイブを運営している組織の担当者と緊密に連携を採りながら実施しており、長期的にはデジタル史料の公開を実現できる見込みである。現物史料の保存についても別途確かな組織と既に約束を取り付けている。また上記の通り、さらなる関連史料が今後入手できる見込みもあり、引き続き確かな史料の保存・公開に取り組んでいく。

②神川彦松日記研究の可能性

本研究課題は基礎的研究であり、また予算上の制約から、翻刻が実現できたのは上記の通りごく限られた期間に留まった。しかしながら、本研究助成によってその重要性は広く認知され、2025年度からは成蹊大学アジア太平洋研究センターの助成を受けて、さらに他領域の研究者を糾合した共同研究プロジェクトが発足する見込みとなっている。とりわけ翻刻体制など本研究課題で得られた知見を十全に活かす予定である。

③若手研究者ネットワーク

大量の日記を短期間に正確に翻刻した本研究助成の副産物として、所属機関のタテ割りに拠らない多くの優秀な若手研究者のヨコのネットワークを育むことができた。すでに関連した協働が生まれており、今後の近現代日本史研究の今後の発展に資するものである。

(完)